ちょうどいい田舎 有田市で暮らす

「あなたにとって有田市ってどんなまちですか?」

そう聞かれたら、あなたはどう答えますか?

出生数の減少や、就学・進学のために若者の市外への転出が続いていることなどから、有田市の人口は、昭和55年の35，683人をピークに減り続けています。

その一方で、有田市に魅力を感じて移り住んでくる方たちもいらっしゃいます。

その方たちがどうして有田市を選んだのか?移住した今、何を思い、暮らしているのか?

私たちが普段気づいていない有田市の魅力を知るうえで、移住者の皆さんの言葉にヒントが隠されているのかもしれません。

人との距離感がちょうどいい

BLUE MARBLE（ブルーマーブル）
瀬戸（せと）悠輔（ゆうすけ）さん・岸田（きしだ）勇人（ゆうと）さん

今回の表紙に登場した、幻想的な矢櫃の魚と宇宙空間を空き家というキャンバスに表現されたのは、京都芸術大学を卒業し、2022年から系我町で体験型の雑貨屋「BLUE MARBLE」を営むお二人。

大阪府・京都府出身。幼少期から都市部の冷たさが苦手で、自然のある場所を求めていたそう。芸大在学中に、自然環境×デザインをテーマに研究を続け、意気投合。デザイン、アートの仕事をしながら、自然環境を守るために活動したいという思いから和歌山を移住先に決め、雑貨屋を開業されました。「移住先に和歌山を選んだのは、むき出しの自然に惹かれているから。和歌山は自然のスケール感、可能性がすごいと思うんです。その自然環境を、デザイン・アートを通じて皆さんと一緒に考え、大切にしていければ。」と瀬戸さん。

移住してきたのはコロナ禍真っ只中。「人とのつながりがない、人脈がない、集まれる場所もない、ないないばかりで焦っていましたが、役場に相談に行ったらいろんな方を紹介してくれました。都会でそんな相談したら変なやつだと思われてしまうかも（笑）ここは、人と人との距離が近くてちょうどいい。最初は都市部から来たから、よそ者がやってきたと思われるんじゃないか、受け入れてもらえないんじゃないか、と不安が大きかったですが、喋ってみたらすぐ友達になれました。」

博物館のような二人の思いが詰まった雑貨屋は、いわば副業だそう。「人が集まれる場所を作って、一緒に考えて活動していきたい。」

25歳の二人は、有田の可能性とこれからのビジョンを、真摯に、熱く語ってくれました。

↑雑貨屋の壁には、これから取り組んでいきたいことの一覧が。BLUE MARBLEは家庭の事情によりクローズしますが、和歌山への愛や自然環境への思いは変わらず、定期的に有田、和歌山で活動していかれます。